

イヌザクラと山菜をめぐる集い 杉山 要
2001年6月16日～6月17日

「イヌザクラと山菜をめぐる集い」に参加されましたみなさま、たいへんおつかれさまでした。楽しい二日間をありがとうございました。そして、このような出会いの場の礎となるMLを構築、管理してくださっている、藤原さんと、YICの池田さんに、あらためて感謝申し上げます。あれから、はや一週間が過ぎて、興奮がさめた頃ではありますが、遅ればせながら、案内人から報告をさせていただきます。

6月16日 なんと、久々の好天第一部 梓坂上から唐松久保（または梓久保）お昼すぎ、東京からの参加者である山田さん、赤桐さん、大村さんと、森の交流館きぎりで再会。そして、大村さんとは初めてお会いしました。ビールで乾杯、話し込むうちに、きぎりの電話に呼び出されました。電話の主は東京の藤原さん。集合場所の梓山公民館から、「集合時間を過ぎてますよ！！」とのご指摘。

会話に夢中になり、滑り出しから大失敗。

大勢の参加者に、頭をペコペコしながら、早速自己紹介の環に加わりました。私、案内人でありながら、この日、どこへどのように行くか漠然としか決めていませんでした。怠慢、というよりも決めることができなかつた、という感じです。それでもやっぱり、ここだけははずせないなあ、と考え、梓山、坂上の関さんの林へ、車3台に分かれて行くことにしました。

ここは、以前、長野県自然保護研究所の藤原陸夫先生の指導で植物調べをし、草木に名札をつけてあるところです。

この名札たちが、初対面のみなさんの会話をはずませる手助けとなったようです。山菜も、たくさん「愛でる」ことができ「よかったよかった」。

続いて訪問したのは、当地で「四工場（しこうば）」とよばれる唐松久保上流にある、イチイ（あららぎ）の林。ここで、実生のカラマツや、木々の下に植えられた、苗の様子などを見ました。そのまま林道を登り、公団のカラマツ林を対岸に見ながら、しばし鳥の声を楽しみました。コマドリ、ジュウイチ、ルリビタキ沢の水音と、エゾハルゼミの声。初夏の川上そのものですね。次に、梓山集落まで下り、再び三国峠方向へ少し登り、前出の関さんの、別の持ち山へ、アズサバラモミを見に行きました。

ここまでの参加者。（すみません敬称を略させていただきます）（埼玉）山田 馨（東京）赤桐雅子、大村紋子、藤原守・松野和恵ご夫妻（佐久市）木村晃（南牧村）中島芳栄、平松義治（川上村梓山）中嶋初女、（原）分部行男・初枝ご夫妻（御所平）杉山要

第二部 梓山 関普一（ひろかず）さん宅予定より30分遅れの16:30。さんざん山を見せていただいた関さんのお宅に、上記メンバーでおじゃましました。

村では「畑」が動き始めており、そちらと掛け持ちの中嶋さんは、しばし離脱。そして関さん宅へも、やはり農作業の合間を見ての訪問となりました。お茶や御菓子、漬物をいただきながら、盛り上がった話題は、村での労働のこと、あとのりのこと等々。

途中から、川端下の佐藤一三、富士子ご兄弟も参加され、はじめて会ったばかりの人たちとは思えないような、中身の濃い会話も聞くことができました。

森の勉強会代表の関初枝さんから、鹿の肉をいただきました。

帰郷中の関さんのお嬢様。おじゃましてすみませんでした。

第三部 梓山 白木屋（しろきや）旅館川上の夜はふけ、白木屋の親睦会会場には、森の交流館の施工に携わった、東信土建（株）の岩崎強さんが急遽参加してくださいました。平松さんの奥様 由貴子さん、森林組合の（勉強会の事務局）山中光雄さん、秋山の林敏幸、京子ご夫妻も参加され、由貴子さん手作りのパンや、初女さんのコレッパを肴に、大いに盛り上がりました。さぞや大切な会話が交わされたことと思いますが、私は、「明日の朝、日の出と同時に毛木場を案内する」とホラを吹いたことと、山田さん持参の福井の酒、「黒龍」の味を覚えているだけで、あとは翌朝までスイッチの切れた状態になってしまいました。（みんな、何を話したのかな

あ???)

第四部 梓山 毛木場 6月17日(参加者二名)5時に山田さんとふたりだけで、千曲源流への登山口である、毛木場(もうきば)駐車場へ向かいました。

清涼な空気、鳥のさえずり、激しい頭痛。楽しい旅の朝にはいつもこの三つがついて回ります(なぜだろう??) 十文字峠への分岐点から千曲川を渡る小さな橋へ。また分岐点へ戻り、山の神にご挨拶をして、駐車場へ帰りました。源流に感謝

第五部 梓山 中嶋秀美さん(=初女さんのだんな様)宅「朝ご飯のあと、コーヒーでもどうぞ」とのおすすめに、中嶋さん宅におじゃましました。ここでは、中嶋ご夫妻のなれそめを聞くことができたとか、できなかったとか...

途中参加の杉山には、よくわからなかった。

第六部 居倉 小川(なかつぱら) 中嶋秀美さんの畑今回、「川上おたく」の赤桐さんが、川上でただひとつ経験していないこと(野菜の収穫)を体験したいとのリクエストがあり、中嶋さんの畑へおじゃますることになりました。前日に続き、廻り目平のキャンプ場別荘から参加の、藤原さんと、野辺山の平松さんご夫妻も加わり、初女さんの実践講義「高原野菜論」に耳を傾けました。参加者一同、納得。

第七部 御所平 重仁親王御霊宮(ごりょうのみや)御所平の木工家、李東さんの作業場を訪ねたあと、今回の川上ツアーの目的であるイヌザクラに会うため、ごりょうさんにお参りました。老木は懐に洞をかまえ、山を背に、ドッシリと訪問者を見下ろしていました。

偶然お会いした氏子の方から、お祭りが5月6日であったこと、そのときに来れば、白馬にまたがった御神体を拝むことができることなどをうかがい、日頃、めったに人に会うことのない場所で、遠方からたずねてきた皆さんが、偶然、そんな話まで聞くことのできた不思議に、目に見えないものを感じたのは、杉山だけかなあ??

第八部 御所平 大西勲さん宅大西勲・たま子ご夫妻のお宅におじゃまし(おおぜいすみません)大西さんのそばうちを拝見しました。大西さんの額に光る汗に、そばうちの大変さをあらためて知りました。

平松さんのお友達である、御代田の柳沢さんや、杉山一家も合流し、前日関さんからいただいた鹿の肉、なぜか茨城県産のトマトなどといっしょに、中嶋さんの畑で採れたばかりのレタスをごちそうになりました。そばの歯ごたえが忘れられません。それにそばチップも、おいしかった。

この後、東京・埼玉から参加の山田、赤桐、大村のお三方は三国峠を越え、秩父回りで家路へ。

二日間の参加者は、我が家の家族も含めると27名。

いえいえ、初女さんの二人のお母様も含めると、なんと29名が参加した、たいへんなツアーでした。

川上の、いわゆる観光地めぐりではない、ガイドブックにも旅行会社のカタログにも載っていない、出会いが連続する旅だったと思います。いろいろとおじゃまし、ごちそうになったみなさん。

村外からはるばる参加して下さった方々。

手料理を持参して下さったみなさん。たいへんお世話になりました。終わってみると、参加者の目を通し、村に居て日頃気づかないことを、新たに発見することができた二日間だったように思います。貴重な体験を、ほんとうにありがとうございました。

長いついでに、ごりょうさんのことなど...

御霊信仰(川上村誌民族編 509~510頁より)

壮途なかばに非業の死をとげた人々には、早良親王、菅原道真、重仁親王などがあり、これらの人々の怨霊の活躍により、疫病が流行したり、天災地変がおこると恐れられた。それを防ぐためには怨霊を神に祀り、盛大に祝い、怨霊を鎮めることが、地域住民のしあわせを守ることと考え

られた。神仏信仰には、この御霊信仰が多かれ少なかれ関係しているであろう。

御霊宮 由緒（重仁親王のこと）

保元の乱に敗れた崇徳上皇は、四国の讃岐に流刑となり、皇子重仁親王は、仁和寺に入って頭を丸めて仏門に入ったが（十七歳）間もなくそこを去って、東国を指して落ちのびた。そして上皇側の将・村上基國をたよって、信濃の国へ入ったが、平地の部分は天皇方の将・海野氏や望月氏、木曾氏らの領地のため、そこをさけて山深い佐久の相木郷へ入った。ここに一時住んだが、更に広い川上谷へ入ってここを居地とした。相木から移るとき詠まれたという歌に、打つ日さす 都を出でて 千曲川上っ瀬遠く 吾は来にけりこの歌を詠まれた地を、臨幸峠と呼び名されている。重仁親王は、伴う妻妾もなく、近臣の藤原忠良らに守られて川上郷へ着き、宮殿を日当たりのよい、御所平の御殿窪に定め、時には兵馬の訓練なども行ったらしく、今でもそれらにまつわる地名が小字名として残っているという。（例 御所平、内裏山、大海道、馬場平、詰堀、鷹揚げ場、鷹放（たかづかい）、天主の台、兵部、天神林等々である）重仁親王は再起の夢もかなわず、この地に崩御された。応保二年八月十五日、二十三歳、内裏山の麓に葬り、幾歳月を経て後、弘治元年（一五五五）に至り、営地に一字を建て、天児屋根命、応神天皇の二神を奉斎し後霊宮とした。

重仁親王伝説をもっと知りたい方は

櫟出版 「川上村のおはなしどんぶり」中嶋初女著 を読みましょう。 以上です